中学校３年間の系統的な美術鑑賞カリキュラムに関する考察

鎌田　純平

本稿の目的は，対話型鑑賞及び作品の特定要素（構図法，明暗法）へ焦点を絞った授業を３年間実施して，教育効果が見込まれるという，カリキュラム論的仮説を検証することである。

そのためにまず筆者の実践する対話型鑑賞の概要とカリキュラムについて説明した後に，授業の代表事例から実践事例的に考察を深めようとした。

授業実践の検証から，生徒が授業を通して作品のよさや美しさを感じ取るとともに，見方や感じ方を深めていた様子が確認できた。次に３年間の鑑賞を終えた後に記入させた生徒の感想文から，生徒の変容について分析を試みた。その内容から，ほとんどの生徒が美術鑑賞に対する興味・関心の深まりを実感していたことが読み取れた。そのため，特に生徒が鑑賞に対してどのように興味・関心を広げ，深めていくのかいう点に焦点を当てて，生徒の感想を考察した。

その結果，「作品の背景情報の知的理解」と、「鑑賞能力（知覚と美的感受力）の定義と序列化（評価）」に大別できた。さらに前者として，１．「芸術学的裏付けの吟味（画家に独自な造形法への知的着眼と，表現効果の確認）」，２．「芸術学的裏付けの吟味（様式や作風の知的理解と，表現効果の確認）」，後者として３．「造形的な特徴の知覚（「明暗，色づかい」「線，筆づかい」「構図，大きさ」など）」，４．「他者の美的感受に対する共感と触発」，５．「主題の美的感受力」，６．「美的なものや主題に対する感受力のあり方の知的自覚」に分類できた。このうち，５の「主題の美的感受力」へと感想が分類できる生徒の人数が最も多かったことから，この項目が生徒の鑑賞に対する意欲・動機付けとして最も効果が高いと捉えられた。美術鑑賞に対する興味・関心の高まりは，生徒達の自立的に鑑賞へ親しもうとする態度の形成へと寄与することが期待できる。

以上のことから，対話型鑑賞及び作品の特定要素（構図法，明暗法）へ焦点を絞った授業を３年間実施することにより，教育効果が見込まれると判断できる。